星槎大学機関リポジトリ

| | |
|---|---|
| Title | 【教育実践報告】<br>省察的実践とアクションリサーチ:アップルヤード夫妻のワークショップを中心に |
| Author(s) | 三輪建二・大野精一 |
| Citation | 星槎大学大学院紀要＝Seisa University Research Studies in Education |
| Issue Date | 2020-3-14 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1486/00000177/ |

教育実践報告

# 省察的実践とアクションリサーチ
## ―アップルヤード夫妻のワークショップを中心に―

三輪 建二[1]・大野 精一[2]
（[1]星槎大学大学院教育実践研究科・[2]星槎大学大学院教育実践研究科長）

**要旨**

イギリスの教育学者ナンシー・アップルヤード、キース・アップルヤード夫妻は、『教師の能力開発』（三輪建二訳、鳳書房、2018 年）の著者である。夫妻は 2018 年 9 月 15 日に来日され、9 月中に、多くが対人関係専門職である社会人大学院生を対象に、著書を用いながら、「省察的実践」および「アクションリサーチ」についてワークショップを実施して下さった。教育学研究科と教育実践研究科の大学院生、および教職員が参加した。

今回の教育実践報告は、夫妻の経歴、２日間のワークショップのねらい実際の展開、夫妻によるプレゼンテーションの概要、そして参加者および大学教員の感想をまとめるものである。参加者の感想では、省察の範囲と深さをめぐる振り返りが見られた。たとえば、問題の解決のための直線的な省察・省察的実践ではなく、メンタルマップの理解、ダブルループ学習が必要性であること、自分自身の教育実践を研究対象とするアクションリサーチも、省察のサイクルとらせん的な展開をくり返すことで、客観性を獲得できること、などである。

**キーワード**：対人関係専門職、省察的実践、アクションリサーチ、メンタルマップ、シングルループ学習、ダブルループ学習

## １．はじめに

イギリスの教育学者ナンシー・アップルヤード、キース・アップルヤード夫妻は 2018 年 9 月 15 日に来日され、9 月 21 日から 23 日にかけて、星槎大学大学院横浜キャンパスにおいて、対人関係専門職にとって「省察的実践」とは何か、および「アクションリサーチ」

とは何かを検討することを目的に、２回のワークショップを実施して下さった。主な参加者は、実践研究科および教育学研究科の大学院生である。その多くは現職の社会人大学院生で、「対人関係専門職」と総称することのできる教育者、保育者、介護関係者、看護関係者である。

この教育実践報告は、アップルヤード夫妻のワークショップのねらいと展開、夫妻によるプレゼンテーション、そして参加者の大学院生の感想（に加えて担当三輪建二）、参加した教員の感想（担当大野）をまとめるものである。

## ２．アップルヤード夫妻の経歴と著作

本大学院紀要の「資料：アクションリサーチをめぐる研究動向―アップルヤード『教育者の能力開発』とラシュトン他『教育者の省察的実践』を中心に―」では、2018 年に翻訳刊行された２冊の翻訳書について、省察的実践とアクションリサーチの２つのキーワードを中心に、内容の比較検討が行われている。そのうちの１冊Ｎ ＆ Ｋ・アップルヤード著、三輪建二訳（2018）『教育者の能力開発：省察とアクションリサーチ』鳳書房（原著 Nancy and Keith Appleyard (2015): Reflective Teaching and Learning in Further Education. Critical Publishing.）は、今回使用したテキストである（以下〔アップルヤード 2018〕とする）。

アップルヤード夫妻は、学校や企業での豊富な実務経験を経て、カレッジや大学の教員となった方々である。〔アップルヤード 2018〕には、次のような実務家教員としての自己紹介の文章が掲載されている（アップルヤード 2018、ii 頁）。

**ナンシー・アップルヤード**

私は社会文化人類学を専攻し、とくに言語、コミュニケーション、人間の相互行為が専門です。最初の職業キャリアは保険会社で、保健一般を取り扱いましたが、次は商業保険会社に勤めました。リンカーン・カレッジに移ってからは保険論、ビジネス・スキル論、コミュニケーション論を教えています。私の関心は、効果的なコミュニケーションを通じて学習者たちが人間として、また専門職としてみずからの人間関係能力をみがきあげるのを支援することにあります。

**キース・アップルヤード**

私は 1978 年から生涯学習分野で、教育者、カレッジ・シニア・マネジャー、教育者トレーナーとして仕事を続けてきました。リンカーン・カレッジでは教育学大学院修了資格（PGCE）プログラムのチューターと主任を担当し、ノッティンガム・トレント大学でも PGCE

教育のプログラム・チューター兼コーディネーターを勤めています。最近では英国基準協会の教育者トレーニング評価や学習・技能改善サービス協会（LSIS）相談役を担当しています。今もナンシーとリンカーンシャーに住み、継続教育分野の共著を本書以外に３冊出しています。

ナンシーは、もともとは保険会社に勤務し、リンカーン・カレッジでもビジネス・スキルやコミュニケーション論を担当していた。ナンシーはカレッジで現職教育者を教えるうちに、職業分野や専門教科を超えて、省察や省察的実践の持つ意義を確認するようになったという。これに対してキースは当初から、教育者としての経歴を持っている。夫妻の共著には、〔アップルヤード 2018〕以外に、*The Minimum Core for Language and Literacy. Audit and Test.* Sage Publications Ltd, 2009. *Communicating with Learners in the Lifelong Learning Sector.* 2010. *The Professional Teacher in Further Education.* 2014 がある。いずれも、中等後教育、職業継続教育の分野で仕事をしている教員向けに、みずからの教育実践の省察を展開し、アクションリサーチを進めることで、専門職としての自覚を促す研修について、具体的な説明をしていると言える。

翻訳を担当した三輪が、〔アップルヤード 2018〕に注目し、翻訳に加えて夫妻に来日とワークショップを依頼したのは、このテキストが、教育学研究科と教育実践研究科の大学院生にとって、省察的実践の理論的理解を進めるだけでなく、みずからの教育実践を省察し、その省察をふまえて実践の改善をはかることができる内容と構成になっていると判断したためである。もう少し具体的に、以下の３点にまとめてみよう。

第１に、各章の構成が、読者の省察や省察的実践を意図して編集されていることがある。各章は共通して、実践事例である〔ケーススタディ〕、ケーススタディを各自の省察的実践へと結びつける〔批判的考察のためのアクティビティ〕、章のポイントを要約してある「章のふり返り」などから構成されている。読者は、省察的実践の概要を知識として学ぶというよりは、〔ケーススタディ〕を通して具体的な事例を学び、その事例とみずからの教育実践とを結びつけて省察する〔批判的考察のためのアクティビティ〕に取り組むことで、みずからの実践を省察する機会を得ることができる。

第２に、〔ケーススタディ〕では、教育者の省察の文章が具体的に紹介されている。イギリスの教育者は、教育実践を省察するために、「省察的なジャーナル」をつけることが多く、その記録文がそのまま採録されている。読者はこれらのジャーナルから、日本とイギリスの教育事情の違いを乗りこえて、教育実践で実際に生じる問題が共通するものであることに共感を覚えていくことだろう。また、教育実践での課題に気づき、課題を省察し、省察をふまえた次の実践の改善に取り組み、改善された実践をあらためて省察するというサイ

クル的な展開についても、大学院生は共感的に理解できるのではないかと考えた。

第３に、本書全体の構成の特徴にある。第１章から省察とは何か、省察的実践とは何かという問いかけはあるものの、すぐに学術的・理論的な説明から入るわけではない。まずは読者の関心に沿って、教育現場で生じているさまざまな実践上の課題を提示し、それに対応する省察や省察的実践の説明から入っている。教育学研究科と教育実践研究科の大学院生の多くは、日々の教育実践に四苦八苦しながら取り組んでいる「実践者」である。〔アップルヤード 2018〕は、省察や省察的実践の実践的な意味について理解を深め、章を追うごとに少しずつ、省察的実践の理論的背景を理解することのできる章構成になっており、大学院生の実践と省察の学びにふさわしい内容と構成になっていると考えたのである。

## ３．ワークショップの企画意図

アップルヤード夫妻は、9 月 23 日にも、大学院生の個別質問に答える時間を設けて下さったが、ここでは、21 日と 22 日のワークショップについて、その概要を説明する。

三輪とアップルヤード夫妻とは、来日前から、ワークショップのねらいと進行スケジュールの打ち合わせを重ねていた。三輪は、専門職の能力開発のキーワードである「省察」と「省察的実践」を初日のワークショップのテーマにすることを提案した。というのは、

１日目も２日目は、自分自身の教育実践を研究することを柱にし、１日目は「省察的実践」、２日目は「アクションリサーチ」をテーマにすることを提案した。大学院生はふたつの研究科に分かれているが、学術的研究という視点に加えて、自らの教育実践を研究して論文にまとめることを希望する方々が少なくないからである。アップルヤード夫妻は、２つの提案をともに了解して下さった。

## ４．ワークショップのねらいと展開

２日間のワークショップは、いくつかのケーススタディを通しながらも、みずからの教育実践について、自分自身で、さらにはお互いに検討し、省察し合うという流れで展開された。２日間ともに、〔アップルヤード 2018〕をテキストに用いている。

### １）省察的実践をあなたの専門職生活の中に

9 月 21 日（土）の２時間半のワークショップの参加者は、教育実践研究科の大学院生・修了生 15 名、教育学研究科の大学院生 3 名、教職員 4 名の合計 22 名である。また会場参加者は 18 名、zoom 参加者は 4 名である。

当初、三輪とアップルヤード夫妻が協働でプランニングした講座とグループワークは、

以下のようになっていた。

**（1）展開1：省察的実践の事例検討（45 分）**

テキスト第２章のソイド（数学教育者）、フランチェスカ（刑務所教育訓練サービスのスペイン語教育者）、ウィンセント（健康・安全指導インストラクター）、アリロン（コミュニティ教育センター講師）の「ケーススタディ」（20～21 頁）を取りあげる。４人の中から１人を選び取り、それぞれの省察的実践の展開について、重要な出来事フォーマット（183 頁）を用いながら、①出来事を記録する、②次回にどう変えるのかを計画する、③変化を実施したときに何が生じたのかを記録する、④変化がどう機能したのかを評価する、の４段階に分けて整理する作業を行う。

次に、自分の省察的実践の事例を紹介し、省察的実践の４つのプロセスについて発表しあう。

**（２）展開２：メンタルマップに関する省察**（50 分）

テキスト第４章のアーリーンのケーススタディ（88～91 頁）をグループで読みあい、教育者であるアーリーン自身の省察的実践の展開を読み取っていく。そのケーススタディでは、アーリーンが、学習者自身に対してあらかじめ描いている「メンタルマップ」の省察をしている点に注目し、参加者自身のメンタルマップについての省察をどのように進めているのかについても、話し合いを展開する。

**（3）展開3：省察的実践に関するプレゼンテーション（45 分）**

休憩をはさんで後半は、参加者は、テキストの「ケーススタディ」と、自分自身の省察的実践をめぐる話し合いを経てから、あらためてアップルヤード夫妻による、省察的実践に関するプレゼンテーションを聴く。ここでは、相手の学習者を理解するさいに、教育者自身の教育活動をめぐる省察、とくに教育者のメンタルマップに気づき、省察することの意味について、話を聴くことになる。終了後は、１週間のあいだに、「印象に残ったこと・学んだこと」という開かれた問いの「振り返りシート」をまとめ、グーグルドライブのフォルダーにあげることをお願いした。同時に、ほかの参加者の「振り返りシート」にも、コメント機能を利用してコメントを書くことになった。

実際のワークショップでは、参加者の了解を得て、展開１の後に休憩を入れ、休憩後は展開２と展開３の順番を入れ替えて実施することになった。これは、アップルヤード夫妻が展開１のアクティビティの展開の様子を参与観察するうちに、参加者が、経験談の語り合いだけでなく、共通のキーワードである「省察」「省察的実践」、そして「メンタルマップ」に関する基礎知識を得たいというニーズがあると判断し、休憩中に、三輪に提案して

きたためである。夫妻は、グループワーク１の展開の中で、ワークショップでの参加者の様子をめぐる省察的実践を行い、日本語が分からないながらも瞬時に、プランニングの変更を申し出たのである。

**２）アクションリサーチについて**

9 月 22 日（日）の２時間半のワークショップの参加者は、教育実践研究科の大学院生・修了生 11 名、教育学研究科の大学院生 5 名、教職員ほか 4 名の合計 20 名である。また会場参加者は 18 名、zoom 参加者は 2 名である。２日目は初回の経験およびアップルヤード夫妻の提案を生かして、2 時間半のワークショップでは最初から、グループワーク⇒ミニ講義⇒グループワークという流れで進めている。

**（1）展開1：アクションリサーチでの省察プロセス（45 分）**

２日目は、テキストのうち、継続教育カレッジ非常勤講師であるケートのケーススタディに焦点をあて、彼女のアクションリサーチの展開を事例として、グループで検討することにした。まず、ケートの教育実践を取りあげ、彼女は自分の教育実践のうち何について省察し、行動を変化させていったのか、その展開を跡付ける作業を行う。やはり重要な出来事フォーマット（183 頁）を用いながら、①出来事を記録する、②次回にどう変えるのかを計画する、③変化を実施したときに何が生じたのかを記録する、④変化がどう機能したのかを評価する、の４段階に分けて整理する作業を行うのである。

次に、自分自身の教育実践をめぐる省察的実践とアクションリサーチについて、４段階のプロセスに即して、おたがいの事例を話し合う時間を設けている。

**（2）展開2：アクションリサーチに関するプレゼンテーション（45 分）**

休憩後は、アップルヤード夫妻がパワーポイントを用いながら、アクションリサーチとアクションリサーチの特徴について、省察的なジャーナルをつける意味などについて、ミニ講義を行い、そのあとは質疑応答の時間になっている。

**（3）展開3：アクションリサーチを仕事に生かすとは（45 分）**

最初のグループワークと夫妻のプレゼンテーションをふまえた上で、あらためて、アクションリサーチを、①自分の仕事（専門職生活）に生かすことの必要性と意味、②アクションリサーチを研究論文の方法論として取り入れる意味と課題、の２点についてグループ・ディスカッションを行った。終了後は、１週間のあいだに自由記入の「振り返りシート」をまとめ、グーグルドライブのフォルダーにあげると同時に、ほかの参加者の「振り返りシート」にも、コメント機能を利用してコメントを書くことになった。

## ５．プレゼンテーションの概要

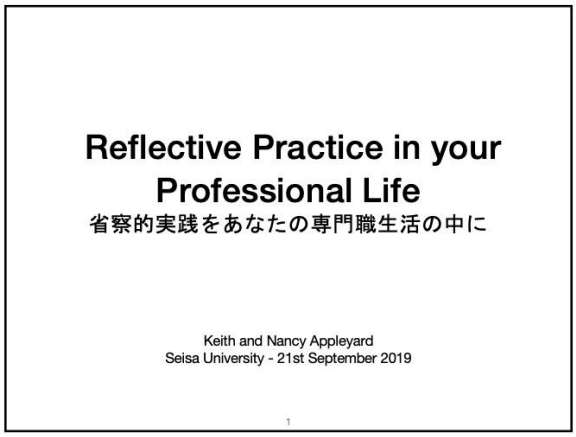
アップルヤード夫妻のプレゼンテーション概要を、パワーポイントとともに説明したい。

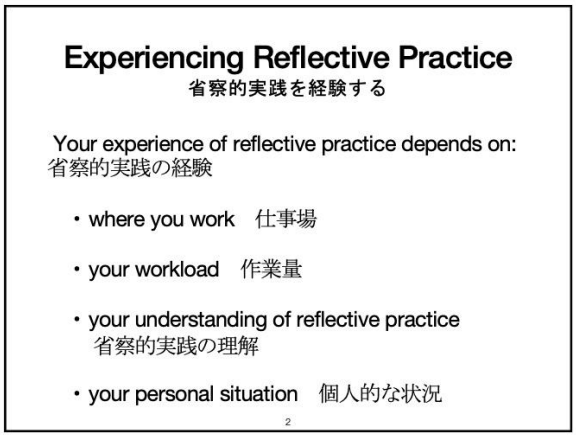
### １）省察的実践におけるメンタルマップとダブルループ学習

初日の「省察的実践をあなたの専門職生活の中に」では、アップルヤード夫妻がパワーポイント資料の中で強調されたのが「メンタルマップ」と「ダブルループ学習」である。

みずからの教育実践の省察をおこなっているものの、「できごと・課題についての省察を通して改善」するのがシングルループ学習であり（スライド４）、できごとだけでなく、できごとを解釈する際に用いている、自分自身のメンタルマップ（「一定のものの味方や枠組み」〔アップルヤード 2018、p.85〕）に気づき、その「メンタルマップが行為をどう導いているかを理解」するのがダブルループ学習であるという（スライド７）。教育者は生徒など相手のメンタルマップと自分自身のメンタルマップを確認し、省察しながら問題の設定と解決を行う必要があるのである（スライド８）。

夫妻は、現場からの問題提起と「問題の解決」だけが目的であれば、シングルループ学習による省察でかまわないが、問題の本質や根底にあるものに気づき、改善することを考えるのであれば、相手（生徒・患者など）のメンタルマップを理解し、同時に、教育者自身のメンタルマップの気づきと省察が必要であることを強調されたのである（スライド 10 ほか）。



## Why Engage in Reflective Practice?
なぜ省察的実践にかかわるのか

Reflective practice helps you to:

- solve problems 問題の解決に役立つ
- create & develop good ideas
  良いアイディアの創造・発展に役立つ

## Single loop learning
シングルループ学習

Reflecting on an event or issue and improving it
できごと・課題についての省察を通して改善

## Double loop learning
ダブルループ学習

Tokyo Subway Map 東京の地下鉄マップ

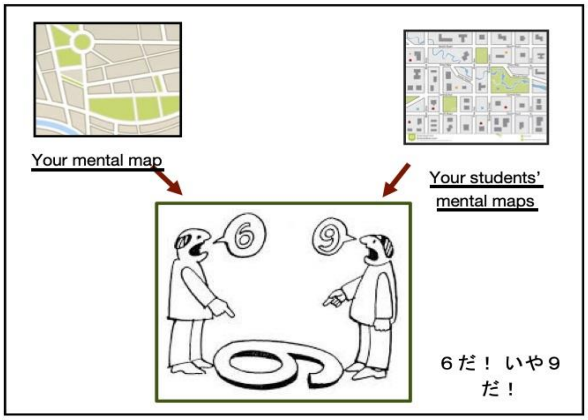
Tokyo Subway Map Mental Map メンタルマップ

## Single loop learning
Reflecting on an event or issue and improving it

## Double loop learning
ダブルループ学習
Understanding how mental maps guide actions
メンタルマップが行為をどう導いているかを理解

Your mental map
あなたのメンタルマップ

Your students' mental maps
あなたの学生・生徒のメンタルマップ



**２）アクションリサーチについて**

２日目のアクションリサーチをめぐるプレゼンテーションで、夫妻が強調したのは、アクションリサーチの中核にあるのは「省察」であり、「省察的実践」であるという視点である。夫妻はまた、アクションリサーチのプロセスは、「研究課題を定める⇒観察（参与観察）・省察・行為⇒新たな計画」といった「サイクル」の展開になる。しかも、１回のサイクルで終わるのではなく、観察・省察・行為のサイクルと何度も繰り返すという意味で、「らせん的」なサイクルになるという（スライド４～５）。

もう一つは、アクションリサーチの出発点が、「あなたの専門職の生活に関連したテーマ」であること（スライド６）、自分の教育実践に加えて相手側の行為とその背景にある理由をさぐる研究であることである（スライド９）。アクションリサーチは研究のための研究ではなく、自分の教育実践と生徒の学習活動の改善と創造をめざす研究なのである（スライド10）。そのためアクションリサーチでは、シングルループ学習と合わせて、「ダブルループ学習」が必要であり、その点では必ずしも快適ではない研究になるという（スライド７）。

夫妻は、アクションリサーチは日々の専門職実践の改善に役立つ研究であるが、修士論文や課題研究をまとめる研究方法としても役立つとも述べている。

## Reflective Practice as a Key Feature of Action Research
アクションリサーチのカギを握る省察的実践

Nancy and Keith Appleyard
Seisa University - 22nd September 2019

1

## Action Research

- involves taking action – do something, then observe and evaluate 行為：行い、観察し、評価
- is run by You - the actor – the one who plans and carries out the action 主役はあなた
- is cyclical サイクル的
- requires critical reflection throughout 批判的（根本的）な省察

2

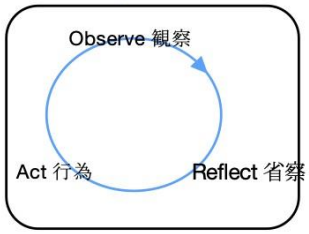
## The Action Research Process

Identify research issue
研究課題を定める

3

## The Action Research Process

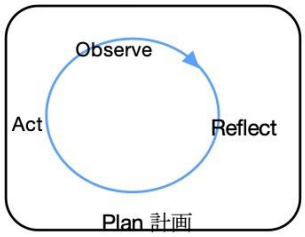
Identify research issue

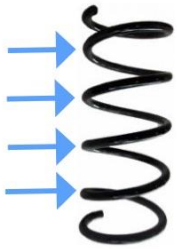


4

## The Action Research Process

Identify research issue



5

## Using Action Research in Research Projects
アクションリサーチを研究プロジェクトに用いる

- Make sure your research topic is relevant to **your** professional life - it is about you and how you relate to others あなたの専門職の生活に関連したテーマ
- Make sure your research topic is manageable 自己管理
  Expect your plan to change 計画の変更も可能
- Record what happens できごとの記録
- Discuss progress and problems with others 他者と話し合い
- Remember key features - focus on you; use lots of strategies; cyclical. 鍵となる特性を思い出す（自分自身に焦点化、方策の活用、サイクル的）

6

**Reflecting in Action Research**
**アクションリサーチで省察すること**

- Reflecting is central to action research
  省察はアクションリサーチの中核
- Needs to involve both single & double loop learning シングルループ＆ダブルループ学習とも必要
- Needs to be responsive　架橋の必要性
- The experience can be uncomfortable
  快適とは言えない経験

**What do you reflect on when you do Action Research?**
**アクションリサーチで省察する内容とは**

- What you do and why
  あなたが行うことがらとその理由
- What your students do and why
  あなたの生徒・学生が行うことがらとその理由

**Why reflect in Action Research?**
**アクションリサーチの中で省察をする理由**

- It helps you to develop new strategies
  新しい手立ての開発
- It changes the way you think 思考様式の変化
- It encourages you to create your own knowledge　自身の知識の創造を促す
- It helps you to become the best you can be at what you do: 'your best self'ベストを尽くす

## ６．本実践の振り返り

今回のワークショップのねらいは、参加者自身が対人関係専門職であることから、ケーススタディの検討と話し合いを通して、自分自身の実践の「省察」と「アクションリサーチ」への理解を深めることにあった。

全体としては、省察とアクションリサーチの基本的理解だけでなく、省察的実践の目的が、職場での問題の解決であったとしても、問題の直線的な解決をめざすのではなく、自分自身の教育実践をめぐるメンタルマップの理解と、そして学習者のメンタルマップの理解というプロセスを経る必要があり、こうしたダブルループ学習を組み入れた省察的実践が必要であることに気づいたという振り返りが多くを占めている。その点では、当初のねらい以上のことをテキストから、お互いのディスカッションから学んでいたのではないかと総括できる。

振り返りシートは自由記入であるが、内部公開にとどめているため、ここではくわしい内容を紹介することはできない。ここでは、許可を得たある大学院生Ａさんの振り返りシートを、次に、２日間参加した大野精一の振り返りを紹介したい。

1）大学院生Aさんの振り返り

＊9 月 21 日：省察により自己の心の奥底にあるものを露わにするのは決して居心地のよい経験ではないが、己を知ることが他者への関わり方に繋がるということなのだと理解できた。ダブルループ学習には、自分だけでなく相手と自分のメンタルマップを理解するという意味も含まれているのではないかと感じた。

＊9 月 22 日：日々迷い、つまずきつつ、軌道修正しながら進むことが実践研究なのだと腑に落ちた。今の自己の実践の後押しをされたように感じ、自信に繋がった。自分自身からの学びはユニークでヴァリアブル、学びのサイクルが自信に繋がり、自分自身の理論に発展する、というお二人の言葉にも力づけられた。自分の学びは他の誰の物でもないと胸を張り、日々の実践の中で自分から学び発展させる気持ちを持ち続けていきたい。

（文責：三輪 建二）

2）教員の振り返り：私の my、われわれの our、そして一般的な general 事実（真実）

アップルヤード夫妻はその著「教師の能力開発」（173、175 頁 三輪建二訳 2018 年 10 月 鳳書房刊）で、次のように書いている。

「経験から得られる知識は、理論的知識や実践的知識と比べて重視されないことがある。またあまりしっかりした知識ではなく、個人的で主観的、直観的とみなされることもある。」「あなたがアクションリサーチ・プロジェクトにたずさわった経験を通して創造する知は、有効であるだけでなく、専門職的あるいは個人的なエンパワーメントになっている。」

この含意はなかなか難しいものを含んでいる。私自身も迷うところであったが、今回の研究会でアップルヤード夫妻へこれに関連する質問（確認）をして、ご夫妻から同意 agreement を得たので、現時点では以下のように解している。

事実 fact、ましてや真実 truth について単純な物理法則等を除けば、その確定が著しく困難である。現在進行中の事態ばかりでなく、過去のこととして実質的には確定したとされても同様で、このことは裁判（訴訟）での事実認定を考えるだけでも了解できる。

事実あるいは真実は、先ず「私の（私にとっての）事実・真実 my fact or my truth」として身近に確信できるものとして表象されるが、これは当然にも自分自身や状況等に対する厳しく突き詰めた省察 reflection から生まれるものである。これが「他者との相互行為、交渉や協働から（を通して）学ぶ知識」（経験的知識）である「われわれの（われわれにとっての）事実・真実 our fact or our truth」に発展・深化すれば、それは理論的知識や実践的知識と同様に根拠ある知識となるのである。ここからさらにさまざまな方法を使って一般

的な general 事実（真実）に辿り着くことができるかもしれない。

ただしここで注意すべきことは、先ず第 1 に、その重要な方法は「省察の省察」すなわち当該諸省察に対する統合的な省察である。第 2 に、ここでの問題・課題・論題は第一義的には「一般的な知識体系」の確立ではなく、あくまでも省察を通して自分自身の「専門職性」を常に成長発達させて、専門職としてのアクションで社会に貢献することである。

われわれは専門職者として再度「一般的な general 事実（真実）」の俯瞰的な視角から「私の事実・真実」を点検（省察）することになる。ここではまた新しい発見が出てくかも知れない。そしてさらに「われわれの事実・真実」に向けて相互的で真摯な議論（交換）が生じて、そこから新しい「一般的な事実（真実）」が浮かび上がってくる。

事実 fact・真実 truth はこうしたらせん状 spiral の展開から把握できるのである。

（文責：大野精一）